

石狩の風

過去、現在、そして未来へ

「川からの風も、海からの風も自由に吹き抜ける」——。かつて石狩に吹く風を、作家の丹羽文雄氏は小説『ぎょうあん暁闇』の中で、このように活写しました。

時に闘い、時に遊び、今も昔も、そしてこれからも私たちの暮らしに密接に関わる石狩の風を、さまざまな角度から見直してみませんか。



防風林は、強い季節風から農作物を守るために残された禁伐地帯。終戦直後には、物資不足から盗伐などの危機もありましたが、今では、大気浄化、騒音防止などの新たな役割も担う存在です。

風との暮らしは、時に闘いでもありました。

風を防ぎ、風に守られた

樹林帯—防風林

開拓時代、母なる石狩川と海がもたらした平らで広大な大地は、一方で荒れ狂う風に対してほとんど無抵抗な場所でもあり、いったん風が暴れ出すと、地表の水分も熱も、豊かな土そのものも吹き飛ばされ、せつかくの作物が駄目になり、入植した私たちの祖先を多いに悩ませたといえます。

この風に対抗するために、彼らが強く望んだものが防風林でした。その歴史は、明治26(1893)年の樽川・花畔・生振原野の殖民区画の際にまでさかのぼることができ、防風林として残すために伐採を禁じられた樹林帯は、盗伐違反をした者を村八分に、防風林内の下草伐刈は禁止するなど、厳

しい取り決めの下に管理されてきました。大正10(1921)年には、農林省告知により「防風保安林」の指定を受け、以来、現在も国有保安林として国が維持管理を継続しています。

現在、「日本一のカシワ林」としても知られる海岸防風林をはじめ、市内には、花川南防風林・花川北防風林・北生振防風林・基線防風林の5つの防風林があります。これらは、住宅地を縦横に走る防風林として、今では道内でも貴重な存在です。ヤチタモ、ハリギリ、ハルニレ、ポプラなどの高木に加え、カタクリ、オオバナノエンレイソウ、エゾエンゴサクなどの植生を見ることができ、樹林帯は、百年以上もの間、石狩の風とともに生きてきた自然ともいえるでしょう。



凍った川で遊ぶ凧たこ上げに、 子どもは胸が躍ったもの。

中島勝久さん（本町在住）

ぶんぶん凧

「昭和30年代の子どもたちにとつて、凧は遊びの対象でもあったね。冬に川が凍ると、そこはスケートやソリの活躍の場。特に、ソりを凧に引かせて走る遊びには、大人も子どもも夢中になったものだよ」。

本町に生まれ育ち、現在は私設資料館「石狩尚古社」を運営する中島さんは、自分の小中学生時代を振り返って、凧との遊びを語ってくれました。

「石狩の凧上げは、ほかではあまり見られない畳1畳以上もある大凧。竹で骨組みを作り、丈夫な和紙を張って思い思いの絵や字を描くのさ。尾も引き糸もロープにして、ぶんぶん鳴るので、ぶんぶん凧と呼んだものさ」。

大きな凧は大人が作るもの。とはいえ、中学生ともなれば半畳ぐらゐの凧なら誰でも作れたといえます。

吹雪の日は、凧が強いので絶好の凧上げ日和。大人が凍った川にソリを載せ、その先端に大凧をくくり付けると、近所の子どもたちが待つてましたとばかりにソリに乗り込みます。大人は、知らん顔というより、むしろ誇らしげに子どもたちを受け入れました。凧に乗って凧が上れば、ソリが面白いように走り出し、スピードを上げたいときは凧を低く、逆にブレーキをかけたときは凧を高く上げる。操る大人の笑い声と子どもたちの歓声が聞こえてくるようです。石狩の凧が大凧だったのは、川

や海など障害物のない場所があったからでしょう。そして、強い凧があったことも、大きな凧を上げることに役立ちました。川でも海岸でも、ぶんぶん音を立てて大凧が舞う姿は圧巻です。

「凧があつたつて、遊びがあるから苦にならないのさ。早く一人前の

凧が作れるようになりたかつたね」という中島さんのお話を聞いているうち、遊びが大人になる通過儀礼として息づいていたところが懐かしく感じられました。もしかすると私たちは、大切な落し物をしてしまったのかも知れないと。



「最近の流れの変化か、川も凍らなくなった」。上流から吹き付ける凧を受け、少年時代を懐かしむ中島さん。